クリシュナ神と番人
イアン・アーノルドによる再話

聖地ヴリンダーヴァンは、クリシュナ神が若い頃を過ごした場所として知られています。神がその都市と緑豊かな周囲の森の地を歩いてから数千年間、ヴリンダーヴァンは彼にささげられた寺院でいっぱいの都市、信仰の中心地であり続けました。

この物語は、そんなヴリダーヴァンの寺院の一つで起こります。それは、目を見張るほどの実に美しい寺院でした。象牙色の荘厳な石のアーチが入り口の目印でした。天井にはクリシュナ神の生涯を描いた手の込んだ絵画が施され、金色のカラシュが寺院の一番奥にある神殿の、円形の屋根のてっぺんで輝いていました。

寺院の一番奥の神殿の中には、クリシュナ神のきらびやかなムールティがありました。そのムールティは等身大で、輝く濃い青色でした。クリシュナ神の頭は豪華なクジャクの羽と、大きなダイヤモンドが埋め込まれた金色の冠で飾られていました。内外からの信奉者が、神のダルシャンを受け、自らの心の中に神の輝く存在を体験するために、その寺院を訪れるのでした。

毎晩、一人の番人が神殿への両開きの扉の外側に立ち、泥棒から寺院とクリシュナ神のムールティを守っていました。15 年間、同じ番人が夕暮れから明け方まで見張り、そのおかげでクリシュナ神のムールティは無事でした。

その番人は、熱心なクリシュナ神の信奉者でした。幼い頃から神をたたえる何十ものバジャンや賛歌を覚えていました。番人は見張りに立ちながら、一晩中、クリシュナ神へのバジャンを次から次に歌うのでした。

ある晩遅く、番人が寝ずの番をしていた時に、すぐ近くに住むその寺院の司祭がそぞろ歩いて来ました。彼は寝付けずに3時間も寝床で寝返りを打ち続けた後、ついに家の近くの周りを散歩することにしたのです。その司祭はインドの教典を学び、自分の知識に大きな誇りを持っている年配の男性でした。彼はまた、非常に尊敬されるインドの伝統音楽家であり歌い手でもありました。

司祭が寺院に近づいた時、中から聞こえるひどく耳障りな音に彼は驚きました。彼は急いで寺院の扉を強く押し開きました。中に入るとすぐ、神殿の扉の前に立って前後に身体を揺らしながら大声でバジャンを歌っている番人を発見しました。その番人の声は鼻に掛かっていて甲高く、完全に音程が狂っていました。

「一体何をしているつもりなのですか？」と、司祭が怒鳴りました。「ここはクリシュナ神の寺院です！　あなたの不快な声が、この場所の神聖さを破壊しているのですよ。神ご自身がその扉の向こうで眠ろうとしているのです！」

同じように驚いた番人は口を開こうとしましたが、司祭は叫び続けました。

「すぐにこの寺院から立ち去り、二度とここにその顔を見せてはなりません！」

番人はショックを受け、急いで寺院から出て行きました。その後数分間、司祭は憤りを放ちました。

「あのような声で神に向かって歌うとは、彼は自分を何様だと思っているのか？」

ようやく、司祭のマインドは落ち着きました。

「もしかしたら、私は番人に対して少し厳しかったかもしれない」と、彼は思いました。「彼は確かにひどい声で寺院を冒瀆（ぼうとく）したが、15 年もの間、忠実な番人だった。そして今、私の他に寺院を守る者は誰もいない。これはもっと考えてからにすべきだった」

司祭は、その夜は番をして立ち、そして朝になったら新しい番人を探し始めようと決めました。

1時間もたたない時、奥の神殿に続く扉の背後から、足音のようなものが聞こえました。

パタ、パタ、パタ。

「あれは何だろう？」と、司祭は不思議に思いました。

彼は神殿への両開きの扉を調べましたが、それらは鍵が掛かったままでした。誰も彼の前を通り抜けることなどできません。彼はずっと起きていた、はずなのに？

パタ、パタ、パタ。

司祭の心臓の鼓動が早くなり始めました。

「たぶん、悪賢い泥棒が、どうかして神殿の秘密の入り口を探し出したのかもしれない」と、司祭は推測しました。司祭は扉の鍵を開けて、勢いよく中に入りました。

眼前の光景を見て、司祭は手で口元を覆いました。

そこには、神殿の窓から煌々と差す月明かりの下で、クリシュナ神が台座の上を行ったり来たり歩いていたのです。

「こんなことが、あり得るのか？」と、司祭は思いました。

そう、実際にあり得たのです。そこには、光り輝く濃い青色の姿をし、きらめく冠をかぶって、月光の下を歩いている神自身がいました。

「何とこの上なく祝福された夜だろう！」と、司祭は心の中で言いました。「私があの無礼な番人を解雇したから奇跡が起こったのだ。クリシュナ神は、この私の名誉ある行為をたたえるために現れたのだ」

「おお、シュリー・クリシュナ・バガヴァーン！」と、司祭が声を上げました。「最愛なる神よ、この最も吉兆で、この上もない、予期せぬダルシャンを受けるに値する、どんなことを私はしたというのでしょうか？」

クリシュナ神は歩を止め、静かに立ちました。彼は目の前にいる男に目を向け、眉を寄せました。

「私は眠ることができないのだ」と、神は答えました。「夜の間中、子守歌を私に歌ってくれていた男が、歌うのを止めてしまったのだ」

再び、司祭は驚きました。「たった今クリシュナ神は、あの番人の金切り声を『子守歌』と呼んだのだろうか？」と戸惑いました。

少しして司祭は我に返り、クリシュナ神に断言しました。「心配なさることはありません、神よ。私があなたのために歌いましょう。私は大変熟達した音楽家です。インド中の人々が私の名前を知っています」

司祭は、大急ぎで隣接した部屋から彼のタンブーラを取って戻ると、注意深く調律し、番人が歌っていたのと同じバジャンを歌い始めました。彼の声はビロードのように滑らかで、音階は正確であり、タンブーラは完璧に音を奏でました。

しばらく聴いていた後、クリシュナ神は、両手を振って司祭に弾くのを止めるよう示しました。

司祭は驚きました。「神はこのバジャンがお好きではないのだろう」と、彼は推測しました。「では、別のバジャンをお聞かせしよう」

司祭がまた歌い出そうと口を開けたその時、クリシュナ神が話しました。

「おお、司祭よ、これまでに存在した最も洗練され、最も巧みな多くの音楽家たちが、私に演奏してくれた。だが、あの番人のような声を聴く機会に恵まれるのはまれなことだ。15 年間、毎晩、私はそれを大きな喜びと共に聴いた。それは私の魂を落ち着かせてくれるのだ」

「しかし、しかし神よ」と、司祭は口ごもりました。「あの番人は音痴で、年老いたヤギのような声をしていました。私の音楽であなたをお慰めできると約束します。あなたにもう一度タンブーラを弾かせてください。そしてその心和らぐ低音でくつろいでください」

クリシュナ神は首を横に振りました。「あの番人を連れてきなさい。急いで」

司祭はそれ以上言い返すことができませんでした。そこで、彼は真っすぐに番人の家へ行きました。玄関前に立つと、中からすすり泣きのくぐもった音が聞こえました。深く息を吸うと、司祭は玄関を三度たたきました。

少しして、番人は玄関を開けました。彼の顔には涙が伝っていました。

「どうして泣いているのですか？」と、司祭は尋ねました。

「おお、司祭様、私は大切にしていたすべてのものから切り離されてしまいました」と、番人は言いました。「最愛の寺院から。最愛の神から。私の人生はクリシュナ神に仕えるためだけにありました」

「では、あなたに良い知らせがあります」。司祭は床に目を落として言いました。「クリシュナ神が、あなたに歌ってほしいと求めています」

番人はあぜんとしました。

「さあ、突っ立っていないで。神がお待ちです！」と、司祭は強く言いました。

番人と司祭は急いでテンプルに戻りました。彼らが到着して神殿の扉を開けると、クリシュナ神はまだ歩き回っていました。

「おまえが去ってから、私は眠れなくなってしまった」と、クリシュナ神は番人の前に立って言いました。「どうか、毎晩そうしていたように、見張りをしてバジャンを歌ってほしい」

ひざまずいていた番人は、驚いて青い神を見上げました。彼は立ち上がり、扉近くの彼の定位置に付くと、歌い始めました。彼の声は相変わらず耳障りでした。いつもにも増して音が外れ、揺れていました。しかし、司祭がクリシュナ神を見上げると、クリシュナ神の目は閉じられ、優しい笑顔が神の顔全体に広がっているのを司祭は見たのです。

司祭も目を閉じ、聴き入ってみると、番人の声の中に以前は気づかなかった音が聞こえてきました。その音は微妙で、音符というより振動でした。でも、それに耳を傾けていると、彼は音の始めと終わりがどこかの感覚を無くし始めました。

少しずつ、司祭は矢継ぎ早に起こる彼の思考や疑問が音の中に溶け込み始めていることに気づきました。彼の意識は心の内側にどんどん深く引寄せられました。そしてじきに、彼は自分の存在にあふれる無条件の至福を感じました。とたんに、以前聞いていたのはただの音符、ただの音であると、彼は思い知りました。これは違いました。これは、あえて言うなら、純粋な愛の音に違いありませんでした。

番人は神にバジャンを次から次へと歌い続け、夜はゆっくりと過ぎていきました。しかし同時に、その夜全体が全く別の次元で起きたことのようでした——まるで、番人が歌っている間は時間が全く存在しないかのようでした。

夜明け前の静けさの中で、神は台座へ戻り、いつもの姿勢を取りました。東の空が、深紅、さんご色、そして金色に変わると、クリシュナ神の顔はその日の最初の光を浴びました。番人は歌うのを止め、神の前で完全なプラナームをして地面にひれ伏しました。この間ずっと、彼は敬愛するクリシュナ神と一つになれたことに、喜びの涙を流していました。

司祭は、番人がプラナームをささげているのを静かに見詰めていました。彼は、クリシュナ神の至福に満ちた顔に踊る、日の光に気づきました。一筋の涙、深い切望の涙が、司祭の頬を伝って落ちました。

この物語は、クリシュナ神についての
インドの民話にヒントを得ています。

© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。